「反撃の弁護士」

山田えみこ

人物

半田　劇（46）弁護士
原田　健司（48）検察官
市村　正（52）裁判官
澤田　克己（32）被告人
傍聴人A
傍聴人B
磯村　明子（54）検察側証人、キオスクの店員
伝令A

○横浜地方裁判所本庁・404号法廷入口

大きな木製の扉の前に、「事件番号　令和3年　（わ）第４５６９号　傷害事件法廷」と看板がある。

半田劇（46）が、襟に弁護士バッチを光らせ、緊張した面持ちで立っている。

腕に抱えた資料の間から一枚のチラシを探り出す。

チラシの文字は「ベニスの商人」。

一瞥し、呼吸を整え、法廷の扉を開く。

○同・法廷内

満席の傍聴人席。

ざわついた法廷の弁護人席に半田がゆっくりと着く。

続いて原田健司（48）と、他の検事二人が、法廷に入ってきて、検察側の席に着く。

ざわめき続ける法廷。

裁判官の制服を着た市村正（52）が、

おもむろに入室する。
やっと、法廷内は静かになってくる。
市村が、正面裁判官席に着く。
奥の扉から、澤田克己（32）が、少々暴れながら入ってきて、被告人席に連れてこられる。両手に手錠をはめられ、看守を二人伴っている。
市村「静粛に！」
澤田は、半田を睨みつけて叫ぶ。
澤田「おい！弁護士！しっかり弁護しろよ！前のやつは、ばんばん反論したぞ!!」
市村「静粛に！澤田克己被告人、あなたの審理をするのは、私は三度目です。いい加減やめてもらいたい」
傍聴人Ａ「あいつ、三度目か」
失笑する傍聴席。
澤田、看守に押さえつけられてしぶしぶ着席する。
市村「それでは、これより、事件番号　令和３年　（わ）第４５６９号　傷害事件の審

議を開始します」
ざわついていた法廷内がやっと静まる。
ポーカーフェイスの半田。

×　×　×

原田が起立し、罪状を読み上げている。
原田「……と、言うわけで、被告人、澤田克己は、中島駅の構内、キオスクの前で米田修一さん51歳と、肩が接触したことで揉み合いになり、突き飛ばし、転倒した米峰さんは頭を強く打って、現在、北中島病院に入院中です」
澤田「ちがう……！」
市村「被告人、静粛に！」
澤田「俺は、ただ肩がぶつかっただけだよ！」
原田「資産家で、裕福そうな米峰さんを、常日頃から苦々しく思っていたんじゃないですか？」
澤田「ちがうよ！」

原田「あなたは、日雇いで……」
澤田「なにぃ!?」
傍聴人B「ひどいわ、言い過ぎよ！」
市村「静粛に！検察側は、言葉を慎むように！」
ざわめく法廷は次第に静かになっていく。
澤田、泳いだ視線を半田に向ける。
半田、視線を資料の上に落とし、反応なし。
澤田、少々、失望の表情を浮かべる。
しょんぼりとする。
看守に取り押さえられ、澤田は着席。
半田、無表情で資料をじーっと見ている。
半田を苦々し気に見つめる澤田。

×　×　×

検察側の発言が続く。
原田「被告人は、被害者に常日頃、駅で顔を

合わせ、並ぶ順番や、たばこを吸っているのを被告人に再三注意されているうちに殺意を募らせ……」

澤田「嘘だ！なんで、そんな話になるんだよ!?」

市村「被告人は、静粛に！」

澤田「嘘だ！」

市村「静粛に！」

ざわつく法廷内。

澤田は、目を泳がせて半田を見る。

半田は、黙って目を瞑っている。

澤田は、息を飲む。

原田「ここで、発言を終わります」

半田、目を瞑ったまま。

焦りの表情で半田を見る澤田。

×　×　×

T・証人尋問

磯村明子（54）が、証言台に立って、

証言をしている。
明子「と、いうわけで、私はこの澤田が、米峰さんを突き飛ばしたところを見たわけです」
澤田「嘘だ！このくそばばぁ！」
市村「静粛に！」
資料に目を落とし、黙っている半田。
ざわつく法廷内。
傍聴人B「あの弁護人、ぜんぜん反論しないわね？」
傍聴人A「まぁ、見てなって」
原田「証人は、この被告をよく見てください」
明子、じーっと澤田を見つめる。
恨めし気な目つきで明子を見る澤田。
原田「米峰さんを突き飛ばしたのは、この男に間違いはありませんか？」
一呼吸おいて、しっかりと、
明子「はい」
澤田「なんだとー!?」
澤田、激怒して明子に掴みかかろうと

する。取り押さえようと、必死になる看守。

市村「静粛に！」

暴れる澤田。収拾がつかなくなる法廷。看守があわてて澤田を取り押さえようとするが、なかなか収まらない。

暴れ続ける澤田。

市村「静粛に！一旦、休廷！」

暴れながら、法廷から連れ出される澤田。後ろの半田を半べそで見つめながら。

再び、前を向き、半田、

半田「くそおぅ！俺には、誰も味方がいないのかようー……」

うなだれ、法廷を出ていく。

見送る室内の者たち。

相変わらず、半田は、じーっと腕を組み、資料を見つめている。

○同・法廷内

T・20分後
法廷内に全員が集まっている。
ざわざわと、席に着き始める傍聴人や、
裁判関係者たち。
突然、扉がばんっ、と開く。
伝令A「大変です！被害者の米峰修一さんが、
死亡しました!!」
（えーっ!?）と、ざわめく法廷内。
市村「静粛に！」
一呼吸置き、
市村「検察側、起訴状を書き換えますか？」
相談を始める原田と検察側の二人。
相談を終え。挙手する原田。
原田「起訴状を、『傷害致死』に切り替えます！」
澤田「嘘だー！」
ざわめく法廷。
市村「静粛に！これより、起訴状を『傷害致
死』に、切り替えます」
証人の明子がうすら笑いを浮かべるの
を、半田が見逃さない。

澤田「（半分泣き声で）俺は、……俺は、……結局、神様にも嫌われるのかよう……」

傍聴人Bが、少々気の毒そうに見守る。

冷静な表情の傍聴人A。

半田、ひたすら、明子をじーっと見る。

泣き崩れる、おいおいと泣く澤田。

市村「静粛に！」

半田、資料の中の明子の資料に目を落とす。そして、持っていたノートの付箋をした部分を開く。大きく見開いた目で眼光鋭くノートを見つめ続ける。

×　×　×

涙を流し、宙をみている澤田。

傍聴席は、ちらほらと同情の目で見つめるものがいる。

市村「検察側証人、前へ」

再び、明子が証言台に立つ。

原田「もう一度、繰り返します。証人は、澤

田被告が、被害者の米峰修一さんを突き飛ばすとき、はっきりと、殺意を感じましたか？」
明子「はい、この人、殺す気だと思いました」
澤田「嘘だ！」
弁護人席で、半田が、じっと「ベニスの商人」のチラシを見つめている。
澤田「なんで、みんな虐めるんだよ!?」
市村「被告人、私語を慎みなさい」
チラシを見つめた半田のまわりが暗転し、上から光が下りてくる。
俯いて膝に手をあて、黙っていた半田が目を瞑り、そして、目を開く。
再び、部屋のなかは明るくなる。
おもむろに挙手する半田。
半田「裁判官！証人に質問！」
市村「発言を許可す」
傍聴人A「きた！『反撃の弁護士』、半村劇の劇が始まるぞ！」